

京大 広報

Kyoto University



※ P4680 参照



※ P4682 参照



※ P4682 参照

2016.9
No. 725

目次

[巻頭言]

『京大広報』改訂にあたって 4678
総長 山極 壽一

[大学の動き]

- 第3回京都大学-稲盛財団合同京都賞シンポジウムを開催 4679
- 「JASTIP 生物資源・生物多様性拠点キックオフ・シンポジウム」および「第2回JASTIPシンポジウム」を開催 4679
- 山極壽一総長がタイ・バンコクにて第3回 ASEAN-JAPAN ワークショップに出席 4680
- 双青戦および七大戦の開会式を挙行 4682
- 総長主催「外国人留学生歓迎パーティー」を開催 4682
- 「京都大学と理化学研究所との連携・協力の推進に関する基本協定」の締結式を挙行 4684
- 日立製作所と組織対応型包括連携の共同研究契約を締結し、日立未来課題探索共同研究部門（日立京大ラボ）を開設 4685

[寸言]

一匹狼の大群 今庄 啓二 4686

[随想]

オリンピックの年に想う 4688
名誉教授 酒井 徹朗

[洛書]

医学部の学生と過ごす2時間 小池 薫 4690

[話題]

- 平成28年度総長杯（卓球大会）を開催 4692
- 第14回京大病院 iPS 細胞・再生医学研究会を開催 4692
- 5つのリーディングプログラム合同のオープンキャンパスを開催 4693

[訃報]

吹田 啓一郎 教授 4694

岡村 圭造 名誉教授 4694



京都大学



巻頭言

『京大広報』改訂にあたって

総長 山極 壽一

学内向け広報誌『京大広報』は、昭和44年5月に創刊されました。創刊当時は、本学においても大学紛争の嵐が吹き荒れていた時代で、大学当局からの正確な情報を教職員、在学生が把握できない状況にありました。新たに設置された広報委員会により、できる限り迅速に正確な学内の情勢を全学に伝えるという目的を持って『京大広報』は生まれました。以来40年以上にわたり、内容の充実を図りつつ、構成員に向けて、大学としての方針や学内における様々な出来事等の正確な情報を提供してきました。

創刊当初は、大学紛争に関わる学内の状況や制度改革などの情報が中心でしたが、昭和52年1月からは月2回の定期刊行となり、部局・施設・研究室の構成や研究の紹介、保健コーナーなど学内の多様な情報を掲載するようになりました。名誉教授に投稿していただくコラムの「随想」欄が登場したのもこの時からで、以後、平成3年1月に現任教員執筆による「洛書」、平成14年9月には卒業生に書いていただく「寸言」の連載が始まりました。また、平成8年4月からは、8月を除く毎月1回と入学式、卒業式の号外を発行するようになり、A4カラー版に変更されました。写真や図版も使って、親しみやすい読みやすいものに改善され、『京大広報』は全学の様々な情報を構成員に伝達する広報メディアとして発展してきました。

しかし、近年のインターネット、情報機器の飛躍的な普及、ホームページの充実等によって、『京大広報』を取り巻く環境は大きく変化しました。本学ホームページに『京大広報』と重複する大学のニュース等が速やかに掲載されるようになり、速報性に劣る『京大広報』は、その存在意義が薄れていきました。すでに平成24年より印刷部数を11,500部から5,000部に削減し、実質的な構成員への配布を取り止め、PDF版を本学ホームページで閲覧する方式に切り替わっています。今回、このような状況を受け、広報委員会で『京大広報』のあり方について検討していただきました。その結果、これまでも本学ホームページにおいてPDF版への相当数のアクセスがあること、記事の一覧性に優れ、過去情報のアーカイブも容易なことから、『京大広報』を紙媒体からWeb版に移行させたうえで、本学の執行部の考えや公式見解を周知し、学内の動きを伝えるための広報媒体として継続することになりました。これに合わせて、デザインを一新するとともに、隔月発行とする等の見直しが行われました。

『京大広報』は、投稿者の皆様からの記事によって支えられています。これまで『京大広報』のために原稿をお寄せいただいた方々、様々な形で発行にご協力くださった関係者の皆様に心より感謝いたします。今後もPDF版『京大広報』が創刊当初からの理念を継承し、学内の相互理解に寄与するとともにますます親しまれる広報誌となることを心がけてまいります。引き続き皆様のご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

第3回京都大学—稲盛財団合同京都賞シンポジウムを開催

百周年時計台記念館において、7月9日(土)、10日(日)に、第3回「京都大学—稲盛財団合同京都賞シンポジウム」(KUIP: Kyoto University-Inamori Foundation Joint Kyoto Prize Symposium)を開催しました。

今回は、「未来への窓—バイオ・メディカルテクノロジー、数学、美術の眼を通して—」の統一テーマのもと、エマニュエル・シャルパンティエ マックス・プランク感染生物学研究所所長、クリスチアナ・ルソー モントリオール大学教授、写真家の石内 都氏など世界の最先端で活躍中の11名(ビデオ講演1名を含む)が講演を行い、クロージング・セッションでは、「シンポジウムの総括と将来展望—統一テーマの視点から—」と題して、各分野登壇者と本シンポジウムの企画を担当した教員に加えて、山極壽一 総長が進行役として登壇しました。一般市民、学生、研究者など2日間合わせて約740名の参加者に対し、学术界と社会の双方から注目されている最先端の話題や興味深いテーマが熱く語られました。



クロージングセッション

聴講者からは、「バイオ・メディカルテクノロジーの内容は興味深く、現段階の研究が把握できた」、「数学は面白いです。変に迎合せず、正面からありのままにその迫力や面白さをPRしていて良かった」、「アートが現実世界と密接につながっていると感じた」、「山極総長の問題意識に深く共感しました」などの感想が寄せられました。



集合写真

(総務部 (渉外課))

[目次に戻る ↗](#)

「JASTIP 生物資源・生物多様性拠点キックオフ・シンポジウム」および「第2回 JASTIP シンポジウム」を開催

6月10日(金)、インドネシア・ジャカルタにおいて、科学技術振興機構(JST)による国際科学技術共同研究推進事業「日ASEAN 科学技術イノベーション共同研究拠点—持続可能開発研究の推進」(JASTIP)の一環として、「ASEANのための生物資源・生物多



「第2回 JASTIP シンポジウム」にて基調講演を行う山極総長

大学の
動き

「JASTIP生物資源・生物多様性拠点キックオフ・シンポジウム」と題した「JASTIP生物資源・生物多様性拠点キックオフ・シンポジウム」を開催しました。同分野にかかる、日本、インドネシア、タイの研究者ら約70名の参加があり、具体的な共同研究の内容について活発な議論が重ねられました。

翌11日(土)には、「ASEAN地域における生物資源・生物多様性研究の意義と展望」と題した「第2回JASTIPシンポジウム」が開催され、本学からは山極壽一 総長、稲葉カヨ 理事・副学長らが参加しました。山極総長含むASEANの研究機関および国際機関等の代表者による基調講演、それに続くパネルディスカッションが実施され、研究者を中心に政府関係者や大学院生等を含む約150名の参加がありました。



「第2回JASTIPシンポジウム」にて挨拶をする稲葉理事・副学長



「JASTIP生物資源・生物多様性拠点キックオフ・シンポジウム」集合写真

(企画・情報部(企画課))

[目次に戻る](#)

山極壽一総長がタイ・バンコクにて 第3回 ASEAN—JAPAN ワークショップに出席

タイ・バンコクにて、6月9日(木)に第3回ASEAN—JAPANワークショップが開催され、本学から山極壽一 総長、稲葉カヨ 理事・副学長、河野泰之 東南アジア研究所長、柴山 守 ASEAN拠点所長と関係職員が出席しました。

本会議は、STSフォーラム(科学技術と人類の未来に関するフォーラム)がASEANで開催するワークショップで、日本・ASEAN双方から産官学の代表者・副代表者クラスが参加し、イノベーション・科学技術分野における協力と発展に向けて話し合う場となっています。

第3回となる今回はタイにてNSTDA(タイ国立科学技術開発庁)との共催により開催、ピチュート・ドゥロンカウエロート タイ国科学技術省大臣、佐渡島志郎 在タイ日本国大使館大使、戸谷一夫 文部科学省文部科学審議官他をはじめ、政府・公的機関(教育省、科学技術省、科学技術振興支援機関等)、企業等経済産業界、大学・研究機関等からあわせて約150名が参加しました。

会議は、基調講演に続いて、午前のセッション1では「ASEAN 諸国の中小企業と日本やシンガポールのグローバルカンパニーとのコラボによる発展の展望」について、午後のセッション2では「世界的な競争力をつけるためのASEAN と日本の人材育成の協力のあり方」につ

大学の
動き

いて、参加者全員で議論されました。

山極総長はセッション2で議長を務め、参加者達の意見を紹介するとともに、ASEANと日本の協力、次世代の人材育成のための大学の役割の重要性と展望についてメッセージを発信しました。また、在タイ日本国大使とタイ国科学技術省大臣がスピーチの中で、本学のJASTIP（日ASEAN科学技術イノベーション共同研究拠点）事業に言及、本学とASEANの各機関との一層の連携促進に期待を述べられました。

プログラムの最後には、産官学での協力体制構築により日本・ASEANの世界的競争力の向上に取り組むこと、さらには世界的な科学技術の向上に向けて、この会議の成果を10月に京都で開催されるSTSフォーラム年次総会へ活かすことが確認され、盛況のうちに会議は幕を閉じました。

第4回は、2017年にインドネシアで開催される予定です。

【関連リンク】

京都大学ASEAN 拠点：

<http://www.oc.kyoto-u.ac.jp/overseas-centers/asean/>

<http://www.oc.kyoto-u.ac.jp/overseas-centers/asean/en/>

JASTIP（日ASEAN科学技術イノベーション共同研究拠点）：

<http://jastip.org/>

<http://jastip.org/en/>



大学の人材育成の役割を語る山極総長



セッション2の様子（左：議長を務める山極総長）



山極総長と稲葉理事がバンコクの本学ASEAN拠点オフィスを訪問しスタッフを激励

（企画・情報部（国際交流課））

目次に戻る ↗

大学の
動き

双青戦および七大戦の開会式を挙

京都大学・東京大学の各運動部の総合対校戦である双青戦および第55回全国七大学総合体育大会（七大戦）の開会式が、7月2日（土）に東京大学で行われました。

午前中に行われた双青戦の開会式では、両大学の応援団による力強い演舞演奏が披露され、お互いの健闘を誓い合いました。

また、午後に開催された七大戦開会式には、山極壽一 総長、川添信介 理事・副学長、守屋和幸 体育会会長も参加しました。昨年度優勝校の東北大学による優勝旗・優勝杯の返還や今年度主管校である東京大学硬式野球部主将による選手宣誓が行われた後、大会マスコット『イチ公』の紹介や、東京大学柏葉会合唱団による合唱、東京大学応援団による演舞演奏が披露されました。

開会式後には、学士会館でレセプションが開催され、各大学の総長によるユーモア溢れるスピーチや東京大学のサークルによる企画が披露されるなど、関係者一同なごやかな雰囲気の中、懇親を深める時間を過ごしました。



応援団による演舞演奏



選手宣誓の様子



大会マスコット『イチ公』



鏡割りの様子

(教育推進・学生支援部(厚生課))

[目次に戻る](#)

総長主催「外国人留学生歓迎パーティー」を開催

百周年時計台記念館において6月16日（木）に、総長主催「外国人留学生歓迎パーティー」を開催しました。

1961年から開催しているこのパーティーは、山極壽一 総長となって2回目となり、理事、部局長、指導教員および学外団体等の関係者など85名が出席し、新入留学生357名の出席者を囲んで交流が行われました。

総長の歓迎の挨拶では、本学のグローバルな環境につ



歓迎のスピーチをする山極総長

大学の 動き

いてのお話があり、また留学生に対して、独創的でワイルドな学生で在ってほしいというリクエストがありました。続いて新入留学生を代表してオランダから来たニナさんとポーランドから来たコーネルさん（日本語・日本文化研修留学生）から、歴史と伝統に囲まれた京都で学ぶことの素晴らしさ、そして地域を知ることの大切さについてスピーチがありました。川添信介理事・副学長による乾杯の発声があると、会場はそれまでの畏まった空気から一気に賑やかな空気に包まれました。今回のパーティーでは初めて、留学生とのトークセッションを実施し、北米、アフリカ、アジア、欧州からの留学生5名に、京都大学を選んだ理由についてお話を伺いました。

恒例の歓迎イベントでは、本学のサークルに所属するアカペラグループ「クレイジークレフ」により洋楽2曲を披露していただきました。美しいハーモニーと楽しい楽曲でパーティーが更に盛り上がりました。

続いて、本学体育会居合道部の演武が披露されました。居合道を初めて見る学生も多く、道着を身につけ鞘から刀を抜き放つ雄姿に、会場は釘付けになった様子でした。

多くの交流を生んだパーティーは、たくさんの笑顔と活気の中、閉会となりました。



スピーチをするニナさんとコーネルさん



乾杯発声をする川添理事・副学長



トークセッション



本学サークル「クレイジークレフ」によるアカペラ



本学体育会居合道部による演武



会場の様子

(教育推進・学生支援部 (国際教育交流課))

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

「京都大学と理化学研究所との連携・協力の推進に関する基本協定」の締結式を挙

本学と理化学研究所は、両機関の包括的な連携・協力を推進する基本協定の締結式を6月29日（水）に京都大学東京オフィスで行いました。

理化学研究所では、国内外の研究機関や大学・産業界との科学技術ハブ機能の形成を通じて、世界最高水準の成果を生み出していくことを目指すべく、平成27年に「理化学研究所科学力展開プラン」を公表しています。本学は、理化学研究所と一体となって科学力の充実を図っていく第1号の大学として基本協定を締結することとなりました。

協定の締結により、平成28年4月に本学に設置した高等研究院において、理化学研究所との連携機能を形成するなどして、両機関がそれぞれ単独では実現できない研究環境・システムを活用した世界最先端研究の展開、新たな研究領域の開拓、およびそれらを担う次世代人材の育成を目指します。



山極総長（左）、松本理事長（右）による協定締結



研究者による主な連携研究プロジェクトの発表



左から伊佐教授、石井副理事、初田理事長補佐、森院長

協定を契機としてさらに推進する代表的な研究課題の紹介では、伊佐正 医学研究科教授から「ヒューマンブレイン」、石井俊輔 理化学研究所副理事から「加齢・老化メカニズム」、初田哲男 同理事長補佐および森 重文 高等研究院長から「数理科学」について、具体的な今後の取り組みを披露しました。

また、人材の交流促進の手法のひとつとして、クロスアポイントメントを効果的に活用するなど、機関の利点を活かしつつ、研究者にとっても有益な環境提供を可能とすることを確認しました。

調印後の代表者挨拶で山極壽一 総長は、「理化学研究所とは現在でも多数の共同研究プロジェクトや、連携大学院制度を通じた理化学研究所研究者による特色豊かな大学院教育が行われているが、優れた研究開発力、最先端研究施設を活用するだけでなく、さらなる相乗効果を生み出し、人類未踏の領域を切り拓いて、人類社会を取り巻く課題に貢献していく。」と述べました。

松本 紘 理化学研究所理事長からは、「まもなく理化学研究所は創立100周年を迎えるが、歴史的に理化学研究所の研究者が帝国大学で研究をしており、現在のクロスアポイントにあたるのがすでに始まっていて、それらの交流によって大学も理化学研究所も中核機関として利点を見出してきた。理化学研究所と京都大学は設立当時からいろいろな研究者が活躍してきたので、関西にも拠点、センターなどを展開し、両機関の幅広い協力が進むことで、社会への貢献力が増すだろう。」との展望が述べられました。本学が持つ豊かなチームワークで、

大学の
動き

人文社会系教員の参画も望みつつ、協力が強化されることが期待されます。

締結式終了後は、両機関による懇談会が和やかな雰囲気の中行われました。



山極総長、松本理事長と両機関役員、研究者

(研究推進部 (研究推進課))

[目次に戻る ↗](#)

日立製作所と組織対応型包括連携の共同研究契約を締結し、日立未来課題探索共同研究部門 (日立京大ラボ) を開設

本学と株式会社日立製作所は、「ヒトと文化の理解に基づく基礎と学理の探究」を推進するため、組織対応型包括連携の共同研究契約を締結し、日立未来課題探索共同研究部門 (日立京大ラボ) を京都大学吉田キャンパス国際科学イノベーション棟に開設しました。(6月23日)

日立京大ラボでは、未来の社会課題を洞察し、ヒトやモノが織りなす社会や文化に関する基礎と学理の探究を通じて、社会課題の解決と経済発展を両立する独創的なイノベーションの創出を目指します。

これらの取り組みの中で、「2050年の大学と企業のあり方」、「人工知能」、「超電顕」の3つのテーマに基づき、課題探索のフェーズから日立と本学の

知見を出し合い、積極的な対話を通じて、社会のあるべき姿を導き出す手法や人工知能、先端計測技術などの技術成果と、本学の幅広い学問領域と深いポテンシャルの融合を図ります。

日立京大ラボでの取り組みを通じ、オープンフォーラムなどを活用した開かれた研究活動の推進や、課題認識や研究成果などの社会への積極的な情報発信を行うことで、「超スマート社会」の実現 (Society 5.0) の貢献を目指していきます。

【プレスリリース資料】



(左) 山極壽一 総長 (右) 東原敏昭 日立製作所社長 於：京都大学東京オフィス

(研究推進部 (産官学連携課))

[目次に戻る ↗](#)

一匹狼の大群

今庄 啓二



いつどのような形だったのか覚えていないが、「一匹狼の大群」という表現を見たことがある。京大や京大生（および出身者）のイメージを表す言葉としてぴったりではないかと思ひ、気に入ってたまに冗談交じりで使うことがある。本来、「一匹狼」というのは、群れから離れ単独で放浪しているオオカミのことであるから、その「大群」というのは論理的に破たんしているのは承知の上である。

今も昔も、世間一般に考えられている京大のイメージをあげるとすれば、自由、変人、独立心旺盛、群れない、形式にこだわらない、権威におもねらない、凝り性、マイペース、個性的といったところであろうか。まさに「一匹狼」という感じである。もちろん時代とともに多少の変化はあるかもしれないが、本質的にはそれほど変わっていないように思う。

ただ、本当の「一匹狼」として、孤立無援で生きていくこともそれはそれでありかもしれないが、ひとりひとは「一匹狼」的でありつつ、社会（大群）に属し、接点を持ちながら事をなしていくことが重要であるように思う。君子は和して同ぜず、小人は同じて和せずである。

私は大学卒業後、大手化学会社であるカネカに入社し、電子材料の研究者を経て、新規事業の企画や開発を行った。その後ベンチャー企業への関心が高まり、21世紀の始まりと同時に当時はまだ少なかった独立系のベンチャーキャピタル（ベンチャー企業に投資し、経営支援を行う会社）に参画し、現在に至っている。これまでおそらく数千というベンチャー企業と出会い、その経営者の方々と接してきたが、起業家という人種（職種ではなくあえてそう呼ぶ）は良くも悪くも「一匹狼」的な方が多く、大雑把に言えば先に書いた京大生のイメージと似通っているのではないかと感じている。リスクを負いながらもイノベーションを起こし、社会にインパクトを与えるためには、技術力、企画力、経営力等が必要であることはもちろんであるが、時には変人扱いされても自分を信じ目標に向かってチャレンジしていく強靱な起業家精神が必要であると思う。

バブル崩壊後長らく低迷した日本経済を活性化するためには、大企業の復活、成長も重要ではあるが、今まさに注目され期待されているのは、ベンチャー企業の躍進である。現在の日本は、米国をはじめとする諸外国に比べ、なかなかベンチャー企業が生まれ育ちにくい国といわれている。実際、起業率や、グーグルやフェイスブックのようなメガベンチャーの数など、さまざまな統計数値をみても、それは明らかである。その原因としては、失敗や敗者復活を許さない風土、安定性を重視する職業意識、独立心や個性を育まない教育、リスクマネーが絶対的に少ない金融システム、未熟なベンチャー支援のエコシステム等、さまざまな理由が挙げられている。

ここで、私が京大に期待することとしては、いわゆる産学連携による大学発ベンチャーの

寸言

創出も非常に重要ではあるが、やはり、起業家精神を持ってイノベーションを起こし、新しい時代を築いていく若者の育成である。先に述べたように、もともと京大生は「一匹狼」的な素養を持っている（と思われている）ことを考えると、起業家に向いているともいえる。京大出身の素晴らしい起業家の方もおられるが、もっと多くてもおかしくはない。例え起業家にならなくても、大企業や官庁などの大組織においても、そこに迎合も安住もせず个性的でキラリと光る力を発揮する人材が今後ますます求められ重要視されることは間違いないであろう。

そもそも京大の先生方こそ、「一匹狼の大群」（山極総長のご専門で言うと「一匹ゴリラの大群」かもしれないが）のような個性派ぞろいである。今後の京大にますます期待するとともに、学生諸君にはリスクを恐れず様々なことに果敢にチャレンジする気概を持って世に出ていただきたい。

（いまじょう けいじ，フューチャーベンチャーキャピタル株式会社 取締役会長
昭和60年工学部合成化学科卒業）

[目次に戻る ↗](#)

随想

オリンピックの年に想う

名誉教授 酒井 徹朗



今年オリンピックの年である。4年前、ミュンヘンのホテルで何気なくテレビを入れたら、007もどきの男性とエリザベス女王がアクションを行っていた。何のドラマかなと、ビールを飲みながら見ていたら、オリンピック開会式の中継だった。TV中継が一般化したため、開会式もセレモニーよりアトラクションが、重要視されるようになったようだ。私がオリンピック中継に初めて触れたのは、メルボルン大会のラジオ中継だった。時差がさほどないため、夜、寝ながら聞いた。当時ラジオは結構な貴重品で、子供の手が届かない棚の上に鎮座し、箱から音が出てくる不思議な存在だった。水泳の中継で、ラジオとオリンピック中継がなぜか記憶に残っている。東京オリンピックは小学生のころ開催が決まり、日の丸、五輪と「TOKYO 1964」のエンブレム、模倣し石膏で作成した。今回のエンブレム問題を聞くにつれ思い出した。東京オリンピックは高校時代、開会式当日は天気が良く、友人らと初秋の山に遠足、女子バレーボールの中継だけが記憶に残っている。為せば成る、突貫工事の時代であった。

情報学研究科が開設されて間もないころ、中国人の留学生と共に、北京を訪れた。リモートセンシングの研究所を訪問した際、その近隣に競技場などのオリンピック関連施設が建設されると、聞いた。広大な空き地と無造作に置かれた瓦礫が印象に残っている。この研究所、その後国費留学生を引き受けるという縁があり再訪、北京オリンピックの数年後だったが、多くの観光客で賑わう鳥の巣の競技場や記念公園を散策した。オリンピックは発展の契機となったようだ。

私の研究フィールドが森林だったので、全国各地の森林を訪れる機会を多く持った。残念ながら、今回のリオ・オリンピックの行われている南米には行ってない。しかし、中国とは縁があり、中国東北部（旧満州）の森林地帯を幾度か訪れた。大興安嶺の森林を訪れたのは1989年、100万ha焼失した大火災の2年後であった。哈爾濱（ハルビン）から夜汽車で一昼夜かかった。その頃の中国、北京などの都会は自転車の波で溢れ、農村は「昭和30年代の日本」の様だった。2012年、再度大興安嶺を訪れる機会を得た。北京から哈爾濱（ハルビン）経由の空路であった。空港が新設されたため、半日足らずで、到達することができた。空港からは高速道路が整備されており、ロシア国境アムール河の中国最北端の地は、観光地となっていた。火災で焼失した森林は、人工植栽や天然更新により、若木が生育していた。北京など車で溢れる大都会の郊外にある、洒落た建物の街並みに、中心部は変身していた。時間をおいて、森林と中国の推移を見られたのは幸이었다。

オリンピック競技のニュースを聞いて、評価には色々あるかと再認識した。100m走等の数値勝負、球技等の対決勝負、体操等の評価勝負。数値勝負は測定基準が簡明で、万人が認める。対決勝負は個々の対決での勝敗は明白であるが、組合せによる運不運がある。その解

随想

消のため、競技によりいろいろ工夫している。個人的には敗者復活戦、心優しい先人の配慮かもしれないが、いらなと思う。評価勝負は、TVの解説者の説明を聞いてもよくわからない。評価基準とその点数により、評価者が判断し、それらの点数を処理する結果らしい。ふと思った。昨今の研究資金採択審査や大学評価に相通じるものがあるなど。研究資金採択では、新規性・独創性・可能性等の項目で評価する。大学評価やランク付けでも、様々項目で評価する。でも、評価者や項目の重み付けにより、評価は異なる。競技監督は選手が良い点をとれるよう、評価基準等と実力を照らし合わせ指導するのがベースであろう。大学はどうであろうかと、三回転半ひねりの報道を見ていた。

4年後のオリンピック、夏野菜が旬の頃、ラジオ中継を聞きながら畑仕事か。

(さかい てつろう 平成25年退職 元情報学研究科教授 専門は生物圏情報学)

[目次に戻る ↗](#)

洛書

医学部の学生と過ごす2時間

小池 薫



医学部には毎年120人の学生が入学する。毎日まじめに授業に出る学生、部活動中心の学生、アルバイトで忙しい学生など、4回生までは各人各様に青春を謳歌しているが、5～6回生になると、出席しなければならない病院実習が続くのであるから、学生も大変である。卒業後はほとんどの学生が医師の道へと進む。

私が担当する京大病院救急外来には、5～6回生が毎週4人ずつやってくる。週初めの月曜日、学生は8時15分からカンファレンスに参加し、週末に来院した救急患者さんがどのように診療されたか、入院患者さんの治療方針がどのように決定されるかを学ぶ。そのあと病棟回診をすると、一段落するのは10時頃だ。しばらくほっと一息ついたあと、私と学生は丸くすわり、約2時間一緒に懇談する。

まず最初に、これから1週間の実習のオリエンテーションを行うが、そのあとは雑談タイムである。私はこの雑談タイムが好きだ。自分が教官であることを一番実感できる時間でもある。

「何科の医師になりたいか？」この質問に対し、卒業前に今後の進路をある程度決めている学生は7割だ。「卒後研修はどこで行うか？」ほとんどの学生は京大や関係病院を希望し、一部の学生が新天地での他流試合を志す。「大学院や学位取得はどうする？」前向きに考えている学生6割。「海外留学は？」是非したい3割、したくない3割、未定4割。これが京大医学部生の現状である。

私はこのあと、「ご両親の歳、例えば50歳になった時にどこで何をしたい？」と質問する。彼らの潜在的な価値観がわかるからだ。その頃には大学、大病院、研究所で働きたいと言う学生が6割を超えるのは京大らしいところだが、楽な暮らしがしたい、想像できない、と答える学生もいる。歳を取ったら楽をしたいと言う学生には、「若い時に頑張って苦労すれば楽ができるよ。若い時に楽をすると、年を取ってから苦労する」とアドバイスする。

私が学生に伝えるメッセージは…。一回しかない人生、是非一流になってほしい。一流とは、ノーベル賞を取るとかだけでなく、どこで何をしても、世のため人のために役立ち、周囲から信頼される人だ。家庭を持てば、夫や妻として一流、親としても一流。とにかく人間として一流をめざしてほしい。そして、博多の歴女 白駒妃登美さんの言葉も引用して次のように話す。『一流になるには2通りの方法がある。ひとつめの方法は夢に向けての逆算方式。例えば4年後のオリンピックで金メダルをめざす選手が、そこから逆算して日々の練習内容を決めるように。でも、ひとつめの方法に関しては、君達は能力が高いから私は心配していない。でも2番目の生き方ができないと、いい人生は送れない。2番目の生き方とは、自分のためにも周りのためにも日々一生懸命生きること。なんだそんなことかと思うかもしれないけど、2番目の生き方で一流になった人が豊臣秀吉。彼は自分の置かれた環境で一生懸命

洛書

知恵を絞り、汗を流した。冬の寒い日に織田信長の草履を懐に入れて温め、「猿、気が利くな。取り立ててやろう」と出世した。一番目の生き方は、どんなにうまくいってもオリンピックの金メダルだけど、2番目の生き方をすると、自分が想像しなかったような高みに連れて行ってもらえる可能性がある。是非、この2つの生き方を実行して、いい人生を過ごしてほしい。』

また、学生達には、大リーガーのイチローが小学生の時に書いた作文や、落語家の桂小金治が幼少時の父親との思い出を書いた文章も読ませる。これらは夢を実現する上で大切なことは何かを物語っているだけでなく、感謝の気持ちを持つことの大切さも教えてくれる。

ある学生が、「先生はなぜ僕達にこんな話をするのですか」と質問した。「こういうことさえしっかりできれば、君達の未来は素晴らしくなること間違いなし」と私は答えた。



重症患者の模擬診療を行う教官と学生たち



救急車で運ばれた患者さんに付き添う学生たち

(こいけ かおる 医学研究科教授 専門は初期診療・救急医学)

[目次に戻る ↗](#)

話題

平成 28 年度総長杯（卓球大会）を開催

7月8日（金）総合体育館（地下1階卓球場）において、平成28年度総長杯（卓球大会）が行われました。昨年より1チーム多い14チームが優勝を目指し終始熱戦を展開しました。当日はかなりの蒸し暑さでしたが、暑さに負けない同僚の熱い応援で場内はたいへんな盛り上がりを見せ、一球一球に大きな歓声が上がりました。決勝戦は、工学研究科「桂ABC」（代表者：野村真由美）チームが、吉田南共通事務部の「BELL CAMPUS MIX（代表者：菅原



優勝した「桂ABC」チーム



準優勝した「BELL CAMPUS MIX」チーム

佐知子）」チームを2対1で下し、見事に優勝しました。試合終了後の表彰式では、山崎宏記 総務部人事課福利厚生室長より優勝、準優勝チームに賞品が授与されました。

（総務部（人事課））

[目次に戻る ↗](#)

第 14 回京大病院 iPS 細胞・再生医学研究会を開催

医学部附属病院は、京大病院iPS細胞・再生医学研究会を去る7月1日（金）に芝蘭会館で開催しました。同研究会は、京大病院でのiPS細胞、ES細胞及び体性幹細胞などを用いた再生医学研究の向上ならびに成果の普及を図り、医療の発展に貢献することを目的として平成21年11月に発足しました。第14回目となる今回の研究会では、学内外から100名を超える医療関係者等が参加しました。

研究会では、稲垣暢也 医学部附属病院長の開会挨拶の後、小泉智信 アステラス製薬株式会社再生医療研究所長より「アステラス製薬の再生研究への取り組み」について一般講演が行われました。また、齋藤 潤 准教授（iPS細胞研究所 臨床応用研究部門）より「iPS細胞を用いた先天性免疫疾患の解析について」について、曾根正勝 特定准教授（大学院医学研究科代謝制御学講座）より「ヒトiPS細胞を用いた副腎皮質発生・分化機構の解明」について、中村英二郎 特定准教授（大学院医学研究科 メディカルイノベーションセンター DSKプロジェクト）より「疾患特異的iPS細胞を用いた遺伝性腫瘍に対する創薬研究」について、それぞれ学術講演を行いました。

引き続き、後藤百万 教授（名古屋大学大学院医学系研究科泌尿器科学）より「当科における下部尿路機能障害に対する再生治療の開発」について特別講演が行われ、参加者は熱心に聞き入っていました。



研究会で開会挨拶をおこなう稲垣病院長



後藤教授による特別講演

（医学部附属病院）

[目次に戻る ↗](#)

話題

5つのリーディングプログラム合同の オープンキャンパスを開催

本学には、以下の5つのリーディングプログラムがあります。リーディングプログラムとは、地球社会にあるグローバル課題を解決するために、博士課程5年一貫制で、専門分野の枠を超えて、幅広い知識、俯瞰的視野、実践力を備えた人材を育成する教育プログラムです。

- ・総合生存学館（思修館）
- ・グローバル生存学大学院連携プログラム（GSS）
- ・充実した健康長寿社会を築く総合医療開発リーダー育成プログラム（LIMS）
- ・デザイン学大学院連携プログラム（デザイン）
- ・霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院（PWS）

この5つのリーディングプログラムをもっと知ってもらおうと、7月2日（土）に東一条館において、合同のオープンキャンパスを開催しました。

オープンキャンパスは東一条館全体を使って、パネルによる紹介展示、紹介プレゼンテーション、体験講座、学生からのメッセージ、相談ブースを実施し、いろいろなコンテンツを通じて理解を深めていただきました。

当日は、本学学生だけでなく、他大学の学生や地域の方々にも参加いただき、思い思いに見て回っておられました。

アンケートでは面白かったと回答された方が一番多く、少しは理解が深まったものと思われれます。ただし、学部生向けの情報をもっと発信してほしいといった意見もあり、今後の課題として改善していく予定です。



体験講座「京都市における 災害シミュレーション」



学生からのメッセージ



相談ブース



紹介プレゼンテーション



パネルによる紹介展示



地域の方にも参加いただいたパネルによる紹介展示

(大学院総合生存学館（思修館）)

[目次に戻る](#)

訃報

このたび、吹田啓一郎 教授、岡村圭造 名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に両氏の略歴、業績等を紹介します。

吹田 啓一郎 教授

吹田啓一郎先生は、6月5日逝去されました。享年57。

先生は、昭和57年3月京都大学工学部建築学第二学科を卒業、同59年3月同大学院工学研究科修士課程を修了、同63年3月同博士課程を研究指導認定退学し、平成6年5月京都大学博士(工学)の学位を授与されました。昭和63年4月京都大学工学部助手に採用され、助教授、准教授を経て、平成21年12月教授に就任、建築生産工学講座・空間構造開発工学分野を担当されました。

先生は、長年にわたって建築構造、中でも建築鋼構造の分野において優れた研究業績を残され、その発展に寄与されるとともに、特に鋼構造の接合部の設計・施工に関する分野において多大な貢献をされました。一連の研究成果に対して、平成12年米国土木学会モイセイエフ賞、平成22年日本建築学会賞(論文)などを受けられました。

また、学内では工学研究科建築学専攻長をはじめとして大学運営に貢献され、学外では日本建築学会、日本鋼構造協会、日本鉄鋼連盟などにおいて、理事、委員会主査などの要職を歴任され、今後の建築構造および防災工学を牽引していくことを期待されていました。

(大学院工学研究科)

[目次に戻る ↗](#)



岡村 圭造 名誉教授

岡村圭造先生は、6月26日逝去されました。享年84。

先生は、昭和30年3月京都大学工学部繊維工学科を卒業後、同32年3月同大学大学院工学研究科修士課程を修了されました。同年4月株式会社興人への入社、昭和36年9月米国ニューヨーク州立大学シラキュース校環境・林科大学研究員、同42年6月ニューヨーク州立大学Ph.D.(化学)の取得後、同43年1月京都大学農学部林産工学教室木材化学講座助手、同43年11月同助教授を経て、同60年4月同教授に就任されました。平成7年3月停年により退官され、同年本学より名誉教授の称号を授与されました。



訃報

先生は、長年にわたり木材化学の教育と研究に携われ、主として物理化学的手法により生分解性高分子のルーツであるポリ-β-ヒドロキシ酪酸の高次構造を研究されるとともに、木材の主要成分であるセルロースの脂肪酸エステル同族体の分子構造と結晶構造について多大な研究業績をあげられました。中でも、トリプロピオネートが特異的に3回らせんをとることをヘテロエステルの利用により解明した先駆的な研究は、国際的に高い評価を得ています。

また先生は、永年にわたり教室の運営に貢献されるとともに、堪能な語学力を活かして本学の国際交流の充実発展に尽くされました。さらに退官後は、平成14年3月に至るまで、京都学園大学（京都文化短期大学）に所属し国際交流委員会を通じて国際科学教育の推進に尽力されました。

(大学院農学研究科)

[目次に戻る ↗](#)